10. 保育園におけるアレルギー・アトピーに関する一考察

高知市役所　枝　重　美　穂（２２回生）
○波　川　京　子（２２回生）
長　崎　美　保（２４回生）

はじめに

保育園においてアレルギー性○○、アトピー性○○と診断された病歴を持つ園児が、急速に増加してきた。そうした子供たちは感染に対して相対的に弱く、風邪や皮膚疾患にかかりやすく、治りにくい。

保育に欠ける子供たちにとって保育園は、一日の３分の１を過す所であり、長い子供は０才児期から小学入学前まで通う所でもある。

乳幼児期の身体づくりはその子供の一生を左右する重要な時期であり、個々の子供に合ったものでなくてはならない。にもかかわらず、集団生活の名の下に発育・発達に総体的な対応しかされていない。保健婦は保育園の健康管理者として、近年増え続けるアレルギー・アトピーをぬきにした身体づくりは考えられない状況になっている。

そのため、アレルギー・アトピーの診断をうけた子供の実態を明らかにし、アレルギー・アトピーが心身に及ぼす影響を把握するためにアンケート調査を行ない、考察したのでここに報告する。

1. 調査方法

アレルギー・アトピーの出現率をみるために、高知市立保育園２３園のうち２園で２３１名の園児を対象に予備調査を６３年１月に行なった。その予備調査を元に６３年２月に５園で、アレルギー・アトピーと診断された経験をもつ園児１００名を対象に身体発育・家族歴・生育歴・住宅環境等のアンケート調査を実施した。そのうち回答のあったものは８２名であった。身体発育については園保存の身体測定表を参考にしたため、回答数１００例になっている。

2. 結　　果

予備調査におけるアレルギー・アトピーの出現率は、対象園児２３１名中１１０名（47.6％）であった。１１０名の回答数を年代毎に分類すると延１２４あった。（表１）　その中でもアトピー性皮膚炎の病歴をもつ児が半数以上の５1.7％をしめている。次いで、喘息・じんま疹となっている。アレルギー・アトピーの出現年令では０才、１才のうちに６2.1％が発症し、中でも

アトピー性皮膚炎が大半をしめている。０才代の「その他」の２名は牛乳・卵アレルギーであった。

予備調査では園児の半数が何らかのアレルギー・アトピー疾患をもち、調査園児の４分の１がアトピー性皮膚炎の既往を持っていた。この数字からいくと園児の８人に１人はアトピー性皮膚炎の既往を持つことになる。

次に、保健婦の勤務する保育園の中の５園で、アレルギー・アトピーの診断歴を持つ園児１００名を対象にしたアンケート調査を行なった。各年令別の身体発育では男女それぞれを昭和５５年の厚生省児童家庭局による「乳幼児身体発育調査」の身長・体重値と比較した。男児では５才、女児では６才までが標準以下の値をしめしていた。（表２）

家庭歴にアレルギー・アトピーがある児は６１名（７６.５％）、ないものは２１名であった。複数回答ではあるが、父系からの影響よりも母系からの影響をより多く受けている傾向がみられ、単に体質的なものか、妊娠中の食事に由来するものかは明らかにできなかった。が、家族歴で注目すべきことは、兄弟姉妹関係に発症していることが多く、祖父母・両親に見られなくても兄弟姉妹関係のみに出現している。このことは遺伝的素因よりも環境の要因が作用していると考えられる。（図１）

予備調査において０才・１才代の発症が多かったことに関連して、０才児期にアレルギー・アトピーのあった児となかった児の離乳食の開始月令の比較をした。牛乳の開始はアレルギー・アトピーのあった児は１０カ月からで、なかった児は６カ月と１２カ月からになっていた。卵・豆腐はある児が５カ月から、ない児は４～６カ月からであった。魚はどちらも５～６カ月からになっていた。牛乳以外の開始時期はどちらの児にも大差はなかった。また、ある時期人気商品になっていた豆乳は全般的に影が薄くなっていた。（表３）

離乳食に先行する母乳・ミルクのみの段階での発症も３分の１あるが、離乳食が本格的に始まり、食品の種類の増える５～７カ月での発症が半数をしめている。前述のように、アレルギー・アトピーの有無はあくまでも結果であり、離乳食を開始して始めてアレルギー・アトピーの診断を受けることが十分考えられる。今後は離乳食の開始の時期と食品の選択を再検討する必要がある。（図２）

０才児期以降の発症年令は予備調査と同様１才代が飛びぬけて高くなっているが、なぜ１才代の発症が多いかは不明のままである。（図３）

さらに、食物とは違った側面から日常生活の場と発症月令との関係を見た。たたみ・ジュウタンからのダニの発生が、アレルギー・アトピーを起こすと言われ始めて久しいけれど、たたみの間にジュータンかカーペットを敷いている家庭が多かった。ジュウタン等を敷いているところでの発症期間はそうでないところに比べて長くなっている。（表４）

部屋の掃除はほとんどの家庭が主に掃除機を使っているが、普通のものか、ダニ用のものか、定かでない。

3. 考　　察

小児の疾患が古典的な細菌を中心とした疾病から、川崎病・小児喘息・悪性新生物・糖尿病・腎疾患などのように以前にはあまりみかけられなかった慢性特定疾患が増加してきている。それと同様に昭和３０年代に始まる高度経済成長までには子供にほとんどみられなかったアレルギー・アトピー疾患やストレス性の疾患が高度経済成長と並行して増加している。この間の変化の最大の特徴は衣食住を中心とする生活全般の洋風化であり、それまでの日本式生活様式を否定することが最良のことと信じられていた。

衣類は木綿中心の自然素材のものから、化学繊維のものになった。食物は自給自足を基本にした米・野菜・魚中心の和食から、乳製品・肉類・卵の動物性食品が増加してきた。人口の都市集中化により、消費地と生産地に分かれ、食品の流通が広がる中で、防腐・保存等のための食品添加物があらゆる食品に使われるようになってきた。洋風の食事を化学調味料を使って摂取することが、頭を良くするとまで言われ、マスメディアも介して食生活は一大変革をとげた。

住居においても、高温多湿の日本の風土にあった夏向きでちょっと不衛生なものから、気密性の高い機能的な新建材を使ったものに変わってきた。またそうすることが文化的であると信じこませながら一般化されてきた。

衣食住環境の変化のみならず、第一次産業から第二次・第三次産業への産業構造の変化は多種多様な化学工業を創り出し、そこからの有害化学物質の流出で大気・河川・土壌・海洋を汚染してきた。日本の至る所で公害問題が起こってきた。同時に、労働形態も変わり、肉体労働から事務・サービス業になり、ストレスを生み出した。

そうした大人社会の変遷は、おのずと子供社会にも影響し、社会の歪みが弱者に現われるように、生活環境の後退は子供の心身をむしばんできている。家族歴に母系からの影響が考えられ、祖父母・両親に発症せず、兄弟姉妹関係の発症が多い現実をみた時、アレルギー・アトピーを偶発的な一過性の疾病と考えることはできない。アレルギー・アトピーは物質的・精神的な複合汚染の産物であると考えられる。

衣食住も含めて環境全体が劣悪化している現在において、全ての原因を除去することは不可能に近い。少しでも発症を抑え、遅らせるために、何をしなければならないかが、今、問われている。

発症率の高い０才代・１才代の母親の関心は食事量と体重増加にあり、人並みかそれよりも早く多くすることで精神的に安定する面も持ち合わせている。そうした母親の気持ちに逆行する内

容ではあるが、離乳食の開始・一回食から二回食への本格化の時期に発症が集中している調査結果をふまえて、動物性たん白質優先の離乳食のすすめ方を考えなければならない。その際、母親の不安が子供の情緒不安を引き起こし、ストレスからアレルギー・アトピーを作らないよう留意しなければならない。

今回の調査で、幼児期後半には標準発育を取りもどし、発症も減少することを認識して幼児期後半に焦点をあてた育児指導を検討する時期に来ている。

おわりに

保育園には現在治療中の児、かつてアレルギー・アトピーの診断をうけたことのある児が延にして、半数はいることを念頭におかなければならない。乳幼児期の身体づくりにおいて、食事は重要な位置をしめている。特に、０才～１才児期の食事は単に発育に重点をおいたカロリー、バランスだけでなく、アレルギー・アトピーを発症させたり、発症を早まらせたりするものであってはならない。

同様に、それがために発達が阻害されたりすることがないように、心身ともに健康な身体づくりを追求していかなければならない。

参考文献

1）「現代と保育」編集部編：食事で気になる子の指導、ひとなる書房

2）大阪府保育所保健連絡協議会：すこやか、№１３、同連絡協議会発行

3）沢田淳編：別刷発達５ここまできた早期発見、早期治療、ミネルヴァ書房

4）家庭栄養研究会編：アトピー性皮膚炎、同時代社

5）厚生省児童家庭局：昭和５５年乳幼児身体発育調査結果報告、厚生省児童家庭局

図1　家族歴　複数回答（％）

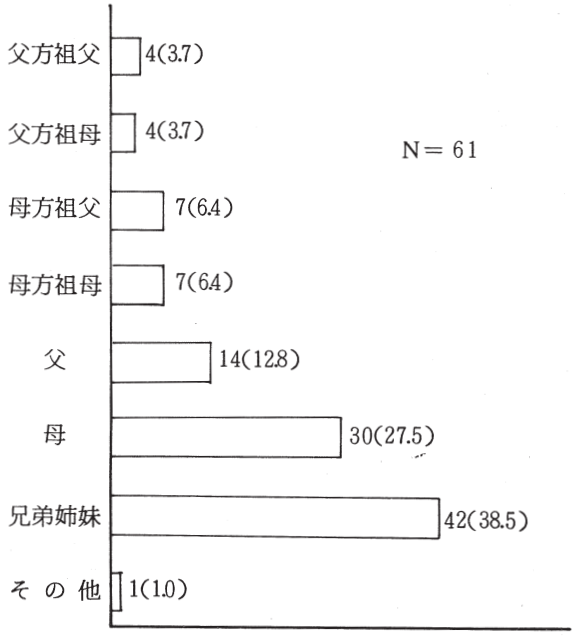

表3　0才児期のアトピー有無と離乳食物開始月令

アトピー	食物＼開始月令	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13以上
ある N＝32	牛乳	0	0	0	0	1	0	0	7	2	6	4
	卵	0	2	8	3	3	1	0	1	0	1	1
	豆腐	2	2	8	2	4	1	0	2	0	0	0
	魚	2	1	5	7	3	0	0	4	0	1	0
	豆乳	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
ない N＝50	牛乳	0	2	0	5	2	1	1	4	2	9	4
	卵	0	8	3	14	2	2	0	0	0	1	0
	豆腐	0	8	4	13	2	3	0	0	0	0	0
	魚	0	3	6	12	1	4	1	2	0	2	0
	豆乳	0	1	0	1	1	1	0	1	0	1	0

表１　　診断別、年代別発症状況　（複数回答あり）　（％）

診　断　名	0才代	1才代	2才代	3才代	4才代	5才代	6才代	計
アトピー性皮膚炎	18 (14.5)	25 (20.2)	11 (8.9)	7 (5.7)	2 (1.6)	1 (0.8)	0 (0)	64 (51.7)
喘　息	7 (5.7)	18 (14.5)	5 (4.0)	5 (4.0)	1 (0.8)	0 (0)	0 (0)	36) (29.0)
じんま疹	4 (3.2)	2 (1.6)	1 (0.8)	4 (3.2)	3 (2.5)	0 (0)	2 (1.6)	16 (12.9)
アレルギー性結膜炎	1 (0.8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0.8)	0 (0)	1 (0.8)	3 (2.4)
鼻アレルギー	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0.8)	1 (0.8)	0 (0)	2 (1.6)
その他	2 (1.6)	0 (0)	0 (0)	1 (0.8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (2.4)
計	32 (25.8)	45 (36.3)	17 (13.7)	17 (13.7)	8 (6.5)	2 (1.6)	3 (2.4)	124 (100)

表２　　年代別身体発育状況

年　　代	男　　児		女　　児	
	標準以上	標準以下	標準以上	標準以下
2　才　代	2	5	1	2
3　才　代	3	8	3	4
4　才　代	7	11	4	9
5　才　代	8	2	5	6
6　才　代	6	4	7	3
小　　計	26	30	20	24
男　女　計	56		44	
計	100			

図２　　０才児期におけるアレルギー・アトピーの発症月令

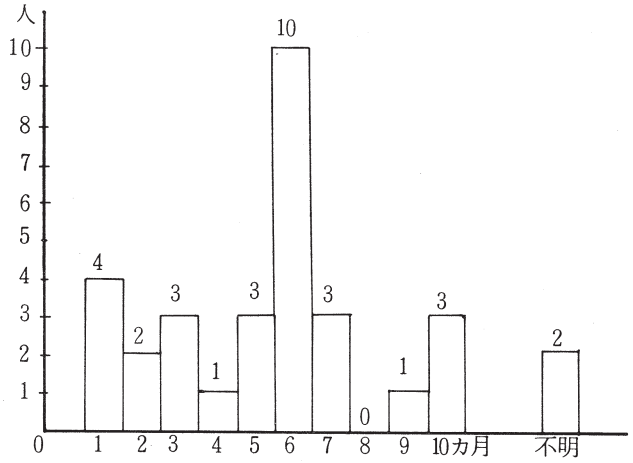

図３　　幼児期におけるアレルギー・アトピーの発症年令

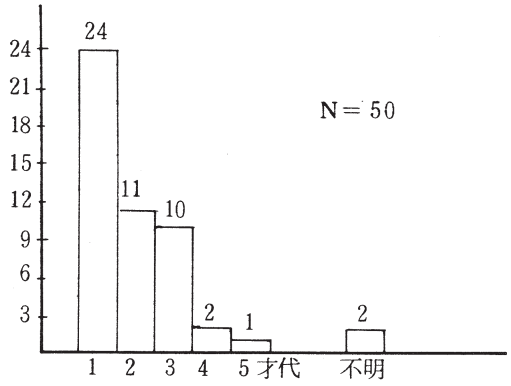

表４　　日常生活の場と発症月年令

発症月年令	0～4カ月未	4～8カ月未	8～12カ月未	1～1.6才未	1.6～2才未	2才代	3才代	4才代	5才代	不明	計
板の間	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
板の間にジュウタン	2	2	1	6	1	4	5	1	0	0	22
たたみの間	3	4	1	8	2	2	2	0	0	1	23
たたみの間にジュウタン	3	5	0	5	4	7	4	1	2	4	35